学の教壇に立ちて天体力学を講ぜし時同君はその聴講者の一人なりしが，顧るに当時余の講義は寧ろ余自身の勉強に外ならず，僅かに西人の書を飜訳口述せる程度にすぎざりしかば，能田君は固より余の弟子とは謂ふ可からず．学足らざる所，之を補ふに酒を以てす．蓋し酒に於ては余は真に同君の師たるを恥ぢずと雖も，その師たるや方に悪師の最たるものなりしか，為めに同君は大正 15 年 (1926) 学を卒ふると同時に突如喀血して病に倒れ，故山に帰りて三年静養の止む莫きに至れり，然れども再起後は酒量旧に倍し，昔日の痩身は今日の巨躯，蓋し能田君の如きは，酒に因りて病を獲，然もよく酒に依りて病を剋したるものと謂ふ可きか．爾来 20 年，能田君と余の交友は酒と分つ能はず，肝膽相照らして機を得れば即ち共に痛飲して夜を徹す．而も今やその酒勢に圧せられて恒に畏敬措く能はざるは余が現状なり，これ能田君が同酒の友たる所以なり．元来能田君は理論宇宙物理学研究に志を立て，渦状星雲進化論の如きは其の得意とする所なりき，然るに昭和 3 年 (1928) 偶々外務省に於て東方文化事業の計画あり，当時此の研究事業の発起者の一人たりし故新城新蔵博士は東洋古来の自然科学の存在を世界に宣揚せんには，支那古代天文学史の徹底的研究に若く莫きを洞察，該方面の研究に新進の人材を求めて余に諮らる．余以為，推理文才倶に備わりて適任なるは能田君を措きて他に有らざるを可しと．乃ち同君の出慮を促せり，此の勧誘は始め同君の心を動かすこと必ずも大ならざるが如くなりき．蓋し理論宇宙物理学の専攻を続けたらむも，今日その権威者となりしこと疑いの余地なかりければなり，然れども同君を新天文学の曠野より古典研究に驅りたてたるは，実に彼の酒の師たる余なりき．かくて同君は東方文化研究所の人となり，古典天文学の造詣愈々深きを加ふると同時に，同研究所の文科諸専家の間に互して研鑽琢磨，支那学研究に専念し，竟には支那学者としても一流の名声を博するに至れり，惟ふに能田君は古典の墓場をして百花燎爛の春野となせる人なり，されば今日余も亦此の方面の学問に興味と関心浅からざるに至りたるは，故新城博士の感化に因るは勿論なれど，能田君の啓発に俟つこと尠からず，機あれば輙ち学を談じ説を論じて往々食を忘る．これ能田君が余の同学の友たる所以なり．今，同君の雄著成るに当りて余に命ずるに序文を以てせらる．固よりその任に非ずと雖も，学酒の友たるもの豈辞するを得べけんや．敢て能田君の清酒一斗に余が一杯の濁酒を添ふる所以なり．

本書は能田君が始め故新城博士の指導を受け，後更らに師の志を継ぎて研鑽十五年，その間に発表せる論文中最も創意に富めるもの六編を輯録して成れるものなり．

と述べられ，さらに本書が中国古代天文学史上に占むべき地位と，著者の研究態度並に研究方法に関して，一般読者諸君に幾分かの理解を与えるために，若干の蛇足を加ふるも亦意義なきにあらずとし，まず礼記月令天文攷をとりあげて概観し，是に由って著者の研究態度と研究方法の一端を窺知することが出来るとしている．ついで周髀算経，漢代論天攷，五星聚井の弁，詩経の日食に就ての五篇についても同様のことを述べている．そして故新城新蔵博士が創設開始された完璧な天文年代学的中国天文学史の学統を完成するものは，その直伝の高足たる能田忠亮君を措いて他にないと激励されたことは，まことに感銘深きものがある．この感銘は今日猶新たなる感激を駆り立ててくれる．ここに謹んで荒木先生の冥福を祈り，先生の期待に沿うてさらに中国古代の天文学を宣揚したいと思う．

荒木先生は昭和 20 年 (1945) 京都大学の教授を退官せられ，府下の上夜久野に隠棲し，専ら著作に没頭，天文宇宙物理学総論，現代天文学事典などの大作を残された．昭和 40 年 (1965) には，京都産業大学を上賀茂本山に創設され，学長兼理事長となり，戦後，真の大学の在り方に留意され，昭和 44 年 (1969) には教養部・経済学部・理学部・法学部・経営学部・外国語学部・大学院と発展して殆んど完全に近い総合大学となった．昭和 46 年にはエルサレム聖ヨハネス修道団よりマルタ騎士団勲爵士，Knight of Grace 十字勲章受章，昭和 51 年 (1976) 5 月 7 日にはポーランド人民共和国からポーランド最高功労十字勲章 (Gold Comandria) 受章された．今年昭和 53 年 4 月 1 日から総長は大学院長も兼ねることとなり，京産大の名声は日に日に国の内外に高まりつつある矢先，荒木総長の急死は，惜みて余りあることである．今少し命を大切にして下さったら，産大の充実も促進できたのではなかったかなどと，つい愚痴っぽくなる．荒木先生ならではの仕事も残されているやに見受ける．今はただ大功院偉哉俊馬居士のご照覧により，遺族はもとより同業のわれら一般にも加護を垂れたまわるようお願いするばかりである．因に先生の享年 81 才．

故荒木俊馬先生 (1897～1978) 略歴

明治 30 年 3 月 20 日	熊本県鹿本郡来民町に生る．
大正 12 年 3 月	京都帝国大学理学部宇宙物理学科卒業
大正 12 年 4 月	京都帝国大学理学部講師
大正 13 年 10 月	京都帝国大学理学部助教授
昭和 4 年より昭和 6 年	ドイツ国に留学
昭和 4 年 8 月 1 日	理学博士授与〔京都帝国大学〕
昭和 16 年 3 月 8 日	京都帝国大学教授
昭和 20 年 1 月	大日本言論報国会理事
昭和 20 年 10 月 29 日	依願京都帝国大学教授退官
昭和 22 年 3 月 10 日	公職追放
昭和 26 年 8 月 6 日	公職追放解除
昭和 29 年 10 月 1 日	大谷大学教授
昭和 39 年 5 月 13 日	日本天文学会名誉会員
昭和 40 年 2 月 1 日	京都産業大学学長（初代）兼理事長
昭和 49 年 9 月 24 日	京都大学名誉教授
昭和 53 年 7 月 10 日	京都市左京区吉田中大路町一番地の自宅で永眠